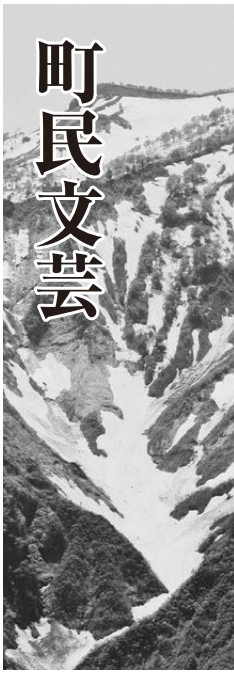


町民文芸

只見短歌会　四月詠草

大塚栄一　指導

雪消えて畑に出られしを聞き取れしか笑みゐて逝きし百二才の叔母　馬場　八智

横断をせんと踏み出せば遮断機の如幼児の手で止めらるる　目黒　富子

遠く住む孫の祝ひの鯉のぼり留守居の庭の空に泳げり　渡部ゆき子

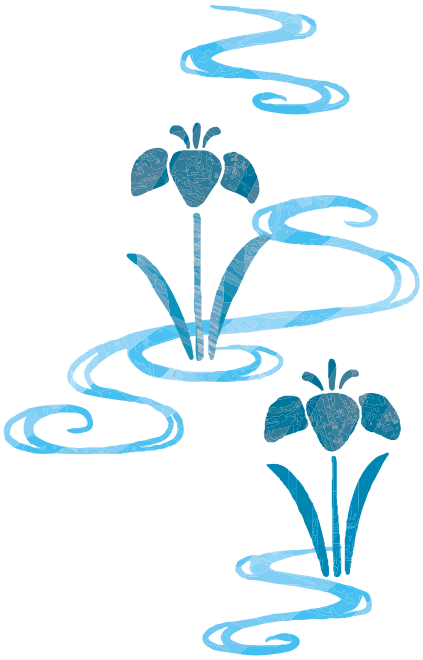
只見小元気愛らし一年生先生曰く三名なのよと　関谷登美子

サバンナの画像流せば飼い猫は時をり溜め息付きつつ見入る　新国由紀子

満開の桜のニュース多けれど我が住む町はまだ蕾なり　渡部ヨリ子

肌寒き雨降り止まず丁寧に仕舞ひしベストまたも取り出す　新国　洋子

（出詠順）



只見俳句会　五月定例会

目黒十一　指導

はきはきと民泊少年夏来たる　恒夫

緑蔭や隠し田らしき田形跡　礼

見得を切る舞台さながら桜散る　一穂

桜散る地につくまでのいのちとも　一穂

鳥の声返す草苗畝の上　修一

キッチン鋏刃先の光春菜摘む　修一

生存の厳しさ故の茂りあり　吉児

ブナ若菜見上げる顔や夕陽さす　吉児

春うらら曾孫二才のボール蹴り　幸生

早蕨や足りたる母の寝息かな　幸生

羚羊の戸惑いの目や春の庭　幸生

廃道の夏を見守る空祠　幸生

羚羊の戸惑いの目や春の庭　信

廃道の夏を見守る空祠　信

春連れて故郷の山只見線　都

桜咲き制服の胸高らかに　都

白髪をしっかりおさめ春帽子　味代子

春セーター着たり脱いだり外来日　味代子

梅の香や杖と佇む二人連　弘子

羅漢仏内緒話しに百千鳥　弘子

それぞれの芽吹きの色や山太る　弘子

春耕に追われる日々よ老い二人　弘子